魔法の塗り薬

―塗布薬による変身をめぐって―

岡田　充博

一

時の古今、洋の東西を問わず、「変身」というモチーフは人々の想像力を刺激し、様々な神話や物語がここから生み出されていった。神々や妖精の自在な変身、人を動物に変える魔女の術、年を経た動物の不思議な変化、あるいは前世の業による転生、等々。そうした多種多様な変身譚を読み進んでゆくと、そこには地域や民族による差違が自ずから浮かび上がってくる。小論では、軟膏や脂薬などを用いる変身の魔術に注目し、東西の異なる特徴の一端を窺ってみることにしたい。

二

先ずは西の変身譚から眺めてゆこう。古代ギリシアの神々の自在な変身、あるいは神々が下す懲罰による変身はさておき、変身術には通常、秘薬や道具が必要とされる。たとえば、ホメロス『オデュッセイア』に登場する魔女キルケは、薬物入りの飲み物でオデュッセウスの部下たちを豚に変える〔1〕。また、哀れな男たちを豚小屋に追い立てる際、彼女が使った杖は、ローマのオウィディウス『変身物語』の同じ話になると、変身術の道具としての役割を担うようになる〔2〕。

不思議な飲食物や魔法の杖は、こうして早くからヨーロッパの変身譚の重要な道具立てとなってゆくのであるが、

もう一つ見逃せないものがある。『オデュッセイア』のキルケの話で、彼女がオデュッセウスの部下たちを人の姿に戻すくだりは、次のように語られている。

…キルケは棒を手に持って、部屋を抜けて外へ出ると、豚小屋の戸を開き、九歳の豚の姿をした男たちを、小屋の外へ追い出した。彼らがキルケに向かい合って立ち並ぶと、彼女は彼らの間を通り抜けながら、一人一人に前とは別の薬を体に塗りつける。すると、先に女神キルケが彼らに飲ませた、恐るべき毒のせいで生えていた毛が、たちまち彼らの体から抜け落ち、再び人間の姿に戻ったが、それも以前よりは若々しく背も高くなり、遙かに秀麗な姿に見受けられた。

（二六四頁）

人を動物に変えるのではなく、動物から人の姿に戻す解毒剤としてではあるが、ここでは塗り薬が変身に一役買っているのである〔3〕。

こうした塗り薬は、降ってローマのアプレイウス『メタモルフォーセーズ』になると、人から動物への変身の際に効力を発揮している。別名『黄金の驢馬』とも呼ばれるこの小説は、術を誤って驢馬になってしまうルキウスという若者が主人公である。所用でテッサリアに出かけ、ミロオという人物の屋敷で世話になった彼は、その妻パンフィレエが実は魔法使いで、夜ごと耳木菟（みみずく）に変身して思う男のもとに飛んでゆくことを知る。そこで自分も鳥になってみたいと考え、懇ろな仲となった下女のフォーティスをそそのかし、パンフィレエの部屋から変身用の薬を盗み出させる。しかし慌てたフォーティスが薬を間違えたため、ルキウスは思いもかけぬ驢馬の姿になってしまう。そしてここから彼の波乱万丈の遍歴が始まるのであるが、変身の場面は次のように語られる。岩波文庫の呉茂一訳（一九九七年第一刷、第一刷は一九五六年）によって読んでみよう。

…娘はすっかりびくびくもので部屋に忍びいり、筐の中から小箱をとり出しました。それを私は受けとるなり先ず胸に抱きしめ接吻（くちづけ）をして、自分にも何とぞ首尾よく羽根が生えて飛べるようお許しをと祈り上げつ、早速著てた衣類をすっかり脱ぎすてると、急（せ）かせかと手を突っこんで塗膏をしこたましゃくい出し、体中くまなく塗りたくりました。

そいでかわりがわり両腕をしきりに振ってみては、今にももう同じような鳥になれようかと待ち構えていたのですが、とんと小羽根一つも、翼はいうまでもなく、生えてくるどころか、見る見る髪の毛は硬くつっ

ぱって荒いたてがみとなり、しなやかだった膚もざらざらした皮に変り、手足の先は五本の指がみんな合さって数が減りたった一つの蹄になると、背筋の末にも大きな尻尾がにょきにょきと生えてるのでした。
もう顔もおっそろしく変って口は長く延び、鼻の穴も大きく開き、唇は垂れ下がり、耳まで異様に大きくなって粗毛に被われています。……

（巻の三、九三頁）

このようにして、変身用の塗り薬もまた、ヨーロッパの変身譚のなかに以後広く浸透してゆくようになる。時代は大きく降るけれども、中世から近世にかけて夥しい犠牲者を生んだ魔女裁判の時代、魔女は空中飛行や変身に軟膏を用いると信じられた。ローズマリ・エレン・グィリー『魔女と魔術の事典』（荒木征純・松田英監訳、原書房、一九九六年）は、「軟膏」の項目で次のように説明している。

民間伝承では、魔女は主として二つの目的で、（呪術師の油）とも呼ばれる軟膏を使うといわれていた。飛行するためと他者を殺すためである。なかには魔女を獣や鳥の姿に変える（→変身）ことを可能にする軟膏もある。何百年にわたり、さまざまな処方が伝えられてきたし、魔術教書という形で出版されてもきている。概してその調剤法は、赤ん坊の脂肪とかコウモリの血といった顔をそむけたくなるような原料や、鐘の削りくずのごとき奇怪な内容物を含んでいる。また、多くの軟膏には薬草や麻薬類が必要であった。それは、ベラドンナ（悪魔の雑草）、毒ニンジン、ウマノアシガタ科植物の乾燥根茎、麻、大麻、マンドレーク、ヒヨス、そしてトリカブトなどである。……

（二九三頁）

関連する「変身」の項では、同書はさらに次のように言う。

魔女は、夜会（サバト）、に飛んでゆくために、棒と箒の柄にまたがり、自分の家の煙突に登るとき、変身するといわれていた。よく見られる形態は、雄山羊、狼、猫、犬、雌牛、野ウサギ、フクロウ、そしてコウモリであった。多くの魔女は現実に、自分たちがこれを行なったと信じていたが、それはたぶん、夜会に先立ち、身体に塗り込んだ軟膏に含まれていた、幻覚誘発的成分の結果としてであったろう。……

（三七〇～一頁）

ほかにロッセル・ホープ・ロビンス『悪魔学大全』（松

田和也訳、青土社、一九九七年）も、「軟膏」の項で、魔女の軟膏を「一、想像のなかでサバトに行くためのもの」「二、箒に乗り、空中を飛行するためのもの」「三、動物に変身するためのもの」の三種に分類して、解説を加えている（四二二～四二六頁）。このように変身用の塗り薬は、飛行用の軟膏の陰に隠れながらも、ヨーロッパの歴史の裏を脈々と生きつづけていたのである。

また、日本民話の会・外国民話研究会編訳『世界の魔女と幽霊』（三弥井書店、一九九九年）が収録する、イタリアのトスカーナ地方に伝わる民話「ロバになって働く魔女姉妹」にも、変身の塗り薬が登場する。物語は、農家の三人の姉妹が、その余りの働きぶりから魔女ではないかと噂されるという展開で、二人の若者が彼女たちの家を見張ることになる。続く後半の変身の箇所を、左に引用しておこう。

ふたりの若者が見張りをかってでて、暗くなるとすぐ、住居の入り口近くの植え込みの陰に身をひそめた。待つこと数時間、戸が開くのが見えた。姉妹が出てきた。ひとりが手に小さな壺を持っていて、その中から、指でなにやらゼリー状の塗り薬を取りだし、自分の腕や脚に塗り、あとのふたりにも同じことをした。たちまち姉妹はロバに変身した。そして、肥やしを積むと畑に運んだ。そんなふうにして一晩じゅう働いた。夜が明けかけると、ロバたちはまた薬を塗って人間にもどった。これで、なにもかも説明がついた。

結局、近所に被害を及ぼすわけではないからという理由で、姉妹はそっとしておかれた。

（二四頁）

こうした魔法の塗り薬の起原は古く、何らかの呪術に塗布薬を用いる習俗となると、前掲の『魔女と魔術の事典』によれば、遙か古代エジプトにまで遡る。エジプト人は、ミイラの防腐保存、予言を受ける夢の促進剤といった多くの目的で、聖なる魔術的軟膏を用いたという（二九三頁）〔4〕。有史以来、魔術や宗教の儀式で重要な役割を果たしてきた聖油の信仰（二八～九頁）から、変身用の塗り薬も派生していったと見てよさそうである。そして、不思議な飲食物や魔法の杖が他者を変身させたのに対し、この塗り薬は専ら自身が変身するために使用された（あるいは使用されると考えられた）ようである。

ヨーロッパにおける変身用の塗り薬の歴史は、おおよそ以上のように辿ることができるのであるが、その他の地域には、こうした塗り薬やそれにまつわる物語はないのであろうか。比較の対象として気になる、東洋の大国中国を次に眺めてみることにしたい〔5〕。

三

中国にも、多様な変身譚が数多く伝わる。たとえば、仙人たちの自在な変身、前世の罪業による畜類への転生、悪行の報いとしての現世での変身、長生による変身、原因不明の変身等々〔6〕。しかし、ヨーロッパに見られた飲食物による瞬時の変身や魔法の杖、あるいは塗り薬による変身の例を見出すことは難しい。

今、小論のテーマである塗り薬について言えば、変身作用を引き起こす塗布薬の話は、おそらく一例もない。ただ、姿を消してしまう隠形の術には、塗り薬が用いられることがある。晋の葛洪『抱朴子』に、次のような記述が見られる〔7〕。

千年の桔木（ヒオウギ）（清の孫星衍は『太平御覽』巻九九二所引の文により、「射干（ヒオウギ）」に作るのが正しいとする）は、その根は坐した人のようなかたちで、長さは七寸、これを刻むと血が流れる。……（中略）……これを身体に塗れば姿を隠せる。姿を現そうとするときは、これを拭う。

千歳之桔木、其下根如坐人、長七寸、刻之有血。……（中略）……以塗身則隠形、欲見拭之。

（内篇巻一一・仙薬）

鄭君は言う「大隠符を十日間服用し、姿を隠したいときは左に回転し、姿を現したいときは右に旋回する」と。あるいは玉犂丸を身体に塗る。……

鄭君云、服大隠符十日、欲隠則左轉、欲見則右回也。或以玉犂丸塗人身中。……

（内篇巻一五・雑応）

しかし隠形とは、あくまでも本来の姿を保った状態で消えるのであって、姿が別の形に変わるわけではない。とすれば、「千歳之桔木」や「玉犂丸」の働きは、やはり変身薬と同一視することはできないであろう。また、こうした隠形用の塗布薬は、『抱朴子』より以後の道書が伝える術の中では、呪文や護符に代わられ姿を消してゆくことになる〔8〕。

したがって、これら僅かな塗布薬の例を除外してしまうと、中国における変身用の塗り薬は皆無と言ってよく、ヨーロッパの場合とは対照的な様相を呈する。中国独自の変身観には、塗布薬という発想とは相容れないものがあったようである。

こうして中国の変身譚においては、塗り薬が効力を発揮する場面は終に存在しないのであるが、ただ一つ気になる点がある。それは、ヨーロッパでは長い歴史と生命を持つ

変身の塗り薬の話が、中国に渡ることは果たして一度もなかったのであろうか、という疑問である。

この疑問に明快に答えてくれる資料は、現在のところ探し出せない。しかし、興味深いのは、唐代敦煌にあった巫油の呪術である。高国藩『中国巫術史』（上海三聯書店、一九九九年）は、第二五章「比較・特性」の第一節「巫油的魔力」で、巫油を飲用あるいは塗布する呪術を、敦煌文書から五例ほど挙げる（四六三頁）。そのうち体に塗る呪法は、次のようなものである。

すべての疥癬病を治療する方法は、清潔な鍋のなかで油を煮て熱くし、次に右手を冷水の中に入れ、その後呪文を唱え、手に呪すること二十一遍で終える。すると熱した鍋の中に入れた手は水のように冷たく、熱さを感じない。次にその手で疥癬の上を擦ると、すぐに治癒して二度と罹らない。

療治一切疥癬病法、於浄當中煮油使熱、次即以右手内冷水中、然後誦呪、呪手三七遍訖、已内熱當中手冷如水而不覚熱、次即以手摩疥癬上、即得永差。

（ペリオ文書三九一四『金剛童子心呪』）〔9〕

もし半身の麻痺・耳鼻の不通・手脚の不随を煩ったならば、胡麻油を青木香で煮て、呪文を二十一遍唱え、患部を摩擦する。そうすれば病は永く除かれ治癒できる。

もし難産だった場合は、胡麻油を取って呪文を二十一遍唱え、産婦の臍および陰部の中を擦れば、すぐに生まれやすくなる。

若患一邊偏風耳鼻不通手脚不随者、取胡麻油煎青木香、呪三七遍、摩穢身上、永得除差。

若難産者、取胡麻油呪三七遍、摩産婦齊中及玉門中、即亦（易）生。

（ペリオ文書三九二〇『千臂千眼陀羅尼神呪経』）〔10〕

これら塗り油による呪術は、すべて当時の医学と結びついたもので、変身術と関わるわけではない。しかし、この巫油に対する信仰が、仮に西方世界の聖油の古い歴史と無縁でないとしたら〔11〕、塗り油による変身の物語が、そうした信仰と共に、この敦煌にまでやってきていた可能性も十分考えられよう。現に、「蛇銜草」や「板橋三娘子」など、シルクロードを通って中国に渡った、西の異域の物語も少なくはないのである〔12〕。想像の域を出ないけれども、聖油に対する信仰やそれにまつわる不思議を語る伝承が、西から中国へと渡る機会は、おそらく少なからずあった。しかし、それが敦煌など辺境の地から更に東へと浸透し、中華の地に広まることはなかったのである。

四

結局、中国において変身術と塗り薬とは、結びつくことがないままに終わったようである。おそらく西から流れ込んだであろう塗布薬の不思議をめぐる話も、中華の地に根付くことはなかった。では、同じ東アジアの末端に位置する、日本の場合はどうであろうか。本節での関心は、こちらに向かうことになる。

日本の変身譚も、元来、飲食物や塗布薬による変身とは無縁であった。『古事記』『日本書紀』の神々の変身から、中古中世の仏教説話に見られる動物への転生など、いずれも薬物とは関係がない。総じて中世以前の日本の変身譚は、中国と同質の、あるいは中国の影響を受けた内容で占められる。また、中国において様々な変身の術を披露した仙人について言えば、大江匡房『本朝神仙伝』等に伝わる日本の話では、天空飛行や鬼神の使役、瓶鉢を飛ばす術の類に留まり、変身術そのものが見られない〔13〕。なお民話の世界には、「鳶と鼠」〔14〕など変身術の話もあるが、中国の仙術同様、瞬時の自由な変身で薬物が使われることはない。

ただ、さらに時代を降って近世になると、説話文学や民話とは別のところから、資料を二つほど拾い上げることができる。一つは、近世初期の狂言「人馬」である。

太郎冠者は、新参の家来を求める大名のもとに、人を馬に変える術を知る男をつれて来るが、何と自分が試しに馬にされることになってしまう。馬にされた後のことを思い、あれこれ仔細に世話を頼んで、この人体実験に臨むのであるが、ここに塗り薬による変身が登場する。大蔵流の虎明本によってその個所をのぞいてみよう〔15〕。

新座〔新参の者〕：いでいで馬に、なさんとて、なさんとて、先山もゝの、かわ〔皮〕をかほ〔顔〕に、すりぬれは、かほより馬にぞなりたりける

《馬のいはへごゑいふ》

大名：されはこそ馬になったは、ぢごく〔地獄〕の馬で、かほ〔顔〕ばかりが人じやといふが、それとはちがふて、是はかほがむま〔馬〕になりかゝった

新座：中々ちとなりかゝりまらした

大名：急ではや〔早〕うなせ

新座：こんどは則馬になすは一ぢやう〔定〕でござるほどに、馬になったらは、にが〔逃〕さぬやうに、はやのせられひ

大名：心えた、まかせておけ

新座：ななを馬に、なさむとて、ちんひ〔陳皮〕かんざう〔甘草〕、色々のかやく〔加薬〕をとりか

へど、中々馬にはならざりけり

結局、術に失敗した新参者は逃げ出し、「この詐欺師め」と二人が後を追いかけるところで劇は終る。馬への変身は首尾よくゆかなかったものの、中国においては全く見当たらなかった変身用の塗り薬が、突如ここに登場してくるのである〔16〕。

いま一つの資料は、江戸元禄七年（一六九四年）刊行の石川流舟『正直咄大鑑』黒之巻に収められた、「夢想の馬ぐすり」と題する次のような艶笑譚である〔17〕。

岩井町といふ所にすみけるもの、浅草の観音のふかくしんじんせしに、あるときふしぎのれいむをかふむりたり。馬になりたり、人になるじゆふのくすりのほうを乞たり。まことにきたいのみやうやく、さかい町へいでてかねまふけせんとよろこび、さてかのやくみ調合して、にかいにあがり、はだかになりてそろそろぬりて見れば、かほむまになり、また手足むまになりたり。女房來りて是をみつけ、さてさていかなる御事に、いきながらちくしやうにはなり給ふとて、とりつきてなげく。彼馬云けるは、すこしもくるしからず。人になる事またじゆふなりとて、わがで〔て〕にくすりをぬりて、くびも手ももとのごとく人になりたり。女房、扨もきたいなる事かな、最早くすりをぬらずとおかしやれ。こしよりしたはむまがよいぞといふた。

ここで使われるのもまた、馬へと変身する塗り薬である。近世文芸のこうした軽妙な笑いの中で、変身用の塗り薬は活躍の場を得たようである。

このような塗布薬の登場は、仏教説話の教導性から脱した、娯楽と好奇心に支えられた近世的な文芸観の誕生とも深い関わりを持っていよう。ただ、それが外来の話にヒントを得たものか、あるいは独自の着想によるものであったのか、最も知りたいこの点については残念ながら明らかでない。しかし、いずれにしてもこの二つの話は、中国にも中世以前の日本にもなかった、東洋においては異質の変身譚として注目されるのである。

五

以上、魔法の塗り薬をめぐって、ヨーロッパ、中国さらには日本と文献を探ってみた。小論では単なる差違の指摘のみに留めざるを得ないけれども、東と西の対照的な相違は、それぞれの呪術的世界や変身幻想の歴史と本質に関わる、大きな問題を背後に持つように思われる。

また、同じ東洋の中にあって、近世期の日本と中国とが覗かせる差違も興味深い。市民層の勃興と、それに伴う文芸の新展開という点からすれば、中国にもまた明代という近世的な成熟の時代があった。しかし日本の場合とは異なり、塗り薬は当時の笑いの文芸にも姿を現そうとしない。

実を言うと、先に挙げた『正直咄大鑑』の「夢想の馬ぐすり」には原話があって、中国に辿ることができる〔18〕。明の馮夢龍『笑府』巻一〇・形体部に載る「巨卵」（二話のうちの第二）がそれであり、ほぼ同じ話が『金瓶梅』の第五一回にも見える。今、松枝茂夫・武藤禎夫共訳『中国笑話選』（平凡社・東洋文庫）により、『笑府』の話を引いておく〔19〕。

病気で死んだ男、閻魔様から、悪事をした罰だとて驢馬の姿にされた。その男、弁明これつとめたので、ようやく疑いが晴れて、また元の姿に返り娑婆にもどることを許されたが、あまり出発を急いだため、驢馬のへのこだけはそのままだった。気がついてから、全部もとの姿にしてもらうよう、もう一度冥土にたのみに行こうとすると、女房があわててとめていうには、

「おひげの閻魔王って、話のわかる人じゃないわよ。わたしはかまわないから、我慢しましょうよ」

（「大へのこ」一四四頁）

有病死而冥王罰為驢者。其人力辨得真、許復故形還魂、因行急、猶存驢卵未變。既醒、欲再往懇復全體、妻勸止之曰、鬍閻王不是好講話的、苦正着罷。

（「巨卵」）

日本では塗り薬へと変化した話も、中国においてはこのように仏教伝播以来の転生譚と結びつく形で語り継がれ、そこから抜け出すことはなかった。この国の変身譚と変身観は、日本よりもずっと強固な伝統的枠組みを持ち、その中に留まり続けたのである。

日本近世の笑いの文芸に現れた変身用の塗り薬は、資料の数からすれば僅か二篇に過ぎず、中国の影響下にあった日本の伝統的な変身観が、これを契機に大きな変化を見せるわけではない。塗り薬の発想の有無についても、些末な違いと言ってしまえばそれまでであろう。しかし、塗布薬という異質の変身譚に覗く、近世日本人の新しがり屋の心性にこだわるならば、そこから日本と中国の異文化受容の在り方に思いを廻らしてみることも、あるいは可能かも知れない〔20〕。そしてもしそうだとすれば、高雅の士の顰蹙を買いそうなこの小咄も、意外なところで学術的な価値を持つことになるのである。

注

1　キルケは『オデュッセイア』の第一〇巻に、アイアイエの島に住む美しい髪の女神、魔法使いとして登場する。トロイア戦争の勇将オデュッセウスは、故国イタケーに向けての船旅の途中、アイオリエの島で怪力のライストリュゴネス一族の襲撃を受け、多くの仲間を失う。そして命からがら逃げ延びた一行がやっと辿り着いたのが、このキルケの島アイアイエであった。彼女は、オデュッセウスが偵察に向かわせた部下たちを、次のような魔法で豚に変えてしまう。以下、引用は一九九四年刊の岩波文庫、松平千秋訳による。

一同は声をあげて案内を乞うた。すると歌の主は直ぐに出てきて、美しい扉を開け中へ招じてくれたので、一同は何も知らぬまま彼女の後に随って中へ入ったが、エウリュロコスのみは、何か企みがあるのを予感して後に残った。キルケは一同を中へ招じ入れると、ソファーと椅子をすすめ、彼らのために、チーズと小麦粉と黄色の蜂蜜とを、プラムノスの葡萄酒で混ぜ合わす。その上さらに、故国のことをすっかり忘れさせるために、恐ろしい薬をその飲み物に混ぜた。一同がすすめられるままに飲み乾すや、キルケは直ぐに彼らを杖で叩きながら、豚小屋へ押しこめてしまった。今や彼らは頭も声も毛も、またその姿も豚に変わったのだが、心だけは以前と変わらぬままであった。こうして泣きながら小屋に閉じこめられている彼らに、キルケはどんぐりの類いやみずきの実など、地べたに寝る豚の常食とするものを餌に投げ与えた。

（上冊、二五七頁）

2　前注引用の『オデュッセイア』訳文の一節、「キルケは直ぐに彼らを杖で叩きながら、豚小屋へ押しこめてしまった」による限り、杖が魔法の道具であったか否かは明瞭でない。しかし、オウィディウス『変身物語』の巻一四では、次のように語られる。以下、引用は一九九五年刊（初版は一九八四年）の岩波文庫、中村善也訳による。

われわれは、尊い手で差し出された杯を受けとり、乾いた喉で、がつがつとそれを飲みほした。恐るべき女神は、杖で、われわれの頭のてっぺんにさわった。それからのことは、いうも恥ずかしいのだが、思い切って話すとしよう。にわかに、こわい毛がからだじゅうに密生しはじめ、口をきくことができなくなって、言葉のかわりに、ぶうぶうというしわがれ声が出るだけだった。……

（下冊、二六四頁）

右の一文では、杖は明らかに魔法の道具として用いら

れている。

同じローマのアポロドーロス『ギリシア神話』摘要・第七章でも、杖の役割は明らかである。一九九九年刊（初版は一九五三年）の岩波文庫、高津春繁訳により引用する。

彼女は各人に、大コップをチーズ、蜜、大麦、葡萄酒でみたし、魔法の薬を混ぜて、与えた。彼らがこれを飲むと、杖で彼らに触れ、その姿を変え、ある者は狼、ある者は豚、ある者は驢馬、ある者は獅子にした。……

（二〇五頁）

3　一方『変身物語』では、該当箇所は次のようになっている。

見知らぬ薬草の、いっそうあらたかな汁液が、われわれのからだにふりかけられた。さかさまにした杖で、頭を打たれる。新たな呪文が唱えられて、前の呪文を帳消しにする。そのまじないをキルケが唱えているうちに、しだいにわれわれのからだが地面から起きあがって、立ちあがる。荒い毛が抜け落ち、ふたつに分かれていた足先から、割れ目がなくなる。……

（二六五頁）

塗り薬が解毒剤として用いられる点は変わりないが、逆さにした杖や呪文など、『オデュッセイア』の話より道具立てが複雑化している。後世の変身譚に及ぼした影響は、おそらく大きなものがあろう。なお、アポロドーロス『ギリシア神話』の記述は、「彼女〔キルケ〕は彼〔オデュッセウス〕の怒りを宥めて、仲間を元に戻した」（二〇五頁）と、こちらは至って簡略である。

4　ただし、E. A. ウォーリス・バッジ著、石上玄一郎・加藤富貴子訳『古代エジプトの魔術』（平河出版社、一九八二年）による限りでは、変身用の軟膏は見当たらない。

5　ほかに中近東やインドなど、いずれも比較してみたい地域ではあるが、この方面の知識に欠ける。ただ、管見の限りでは中近東にもインドにも、塗り薬による変身の例を見出すことができない。『アラビアンナイト』には、周知のように、しばしば変身の場面が登場する。しかし、それらはいずれも、呪文を唱えて水をふりかける、土をつかみ呪文を唱えて振りかける、呪文、呪いの言葉、自在な変身などで、変身用の塗布薬は一千一夜を通じて一例も見当たらない。また、ジャン・ボテロ『最古の宗教―古代メソポタミア』（法政大学出版局・りぶらりあ選書、二〇〇一年）の「宗教的振る舞い」の記述によれば、古代メソポタミアの祭儀においては、神々への灌奠（液体を注ぐ儀式）が重要な意味を持っていたようであるが、

巫油は使用された形跡がない（「祭祀」の項）。呪術も手による操作と呪文によるもので、薬物は使用されなかったようである（「祓魔　―祓魔と呪術」の項）。

塗り薬による変身は、結局、ヨーロッパに特徴的な発想ということになるであろうか。専家の教示を仰ぎたい。

6　中国の変身譚・変身術については、拙稿「『板橋三娘子』考（三）」（『東洋古典学研究』第一二集、二〇〇一年）および同「補訂」（同書第二〇集、二〇〇五年）において論じた。なお、小論は全体にわたって「『板橋三娘子』考」と重なる部分が多いが、幾つか新見も付け加えたつもりである。御諒解いただきたい。

7　原文は、四部叢刊影印明刊本による。

8　宋代以降の隠形術については、「『板橋三娘子』考（三）」七七頁参照。

9　原文は、黄永武主編『敦煌宝蔵』（新文豊出版公司、一九八六年）第一三二冊の写真資料による（五頁上段）。「於浄當中」の「當」は、「鐺」字の音通と思われる。

10　原文は、前掲書同冊の写真資料による（一七三頁下段）。「即亦（易）生」の箇所は、「即亦生」とある「亦」字の右横に、「易」字が書き添えてある。これも音通の用法であろう。

11　なお高国藩『中国巫術史』は、マリノフスキーの著作からメラネシアの巫油の例を引き、さらにマレーシアに伝わる習俗を紹介して注意を喚起する（四六二～四六五頁）。しかし言うまでもなく、メラネシアと敦煌との間には大きな地理的隔たりがあり、高氏もこれを敦煌の巫油の起原と考えるわけではない。逆に敦煌文献をこれらの習俗よりも古い資料として注目しているのであり、巫油の起源については別途に考察される必要がある。

12　南朝宋・劉敬叔『異苑』巻三の「蛇銜草」の話が、ギリシア神話のポリュイドスの話に起源を持つことについては、小島瓔禮『蛇をめぐる民族自然誌・蛇の宇宙誌』（東京美術、一九九一年）の第六章、「三枚の蛇の葉　―日本の落語から古代ギリシアまで―」に指摘がある。「板橋三娘子」の原話については、拙稿「『板橋三娘子』考（一）」（『東洋古典学研究』第八集、一九九九年）を参照されたい。

13　日本の変身譚・変身術については、拙稿「『板橋三娘子』考（五）」（『東洋古典学研究』第一六集、二〇〇三年）で概観した。

14　「鳶と鼠」については、稲田浩二・小沢俊夫編『日本昔話通観』全二九巻・研究篇二巻（同朋舎、一九七七～一九九八年）に、東北から九州にわたる諸話が採録されている。一例を挙げると、長崎に伝わる話はつぎのようなものである（第二四巻、五八六頁）。

化けるのが上手な男が二人、互いに馬と博労に変身

する。馬に化けた方が売られて逃げ帰り、金を儲けるのである。しかしある時、逃げ損ねて捕えられ、打ち首ということになった。その男は刑場で高い竿を見て、最後の願いに登らせてくれと頼む。許しが出ると、男は鼠に化けて竿の上に登り、チュウチュウと鳴いた。するともう一人の男が化けた一羽の鳶が、鼠を銜えて飛び去ってしまった。

15 池田廣司・北原保雄『大蔵虎明本　狂言集の研究　本文篇上』（表現社、一九七二年）により（二二二～二二五頁）、ルビ・踊り字・特殊記号等を若干改めた。

16 なお、この狂言の台本は、実は流派によってかなりの違いが見られる。最も古形を存する天理本では、変身法は「山ももの粉をかへば口へ入ル」と、飲み薬になっている。ただ、大蔵流虎明本や鷺流保教本に見られる、飲み薬から塗り薬への変更の委細については明らかでない。「人馬」諸本の異同については、田口和夫『狂言論考　―説話からの形成とその展開』（三弥井書店、一九七七年）所収の「共謀する下人　―『人馬』の形成と説話」に詳しい。

17 『正直咄大鑑』は、『近世文芸叢書　第六・笑話』（国書刊行会、一九一一年）、武藤禎夫編『噺本大系　第五巻』（東京堂出版、一九七五年）などに収められている。引用は『噺本大系』をもとにし（二七七～八頁）、『近世文芸叢書』を参照して一部をあらためた。ルビについても、読みの明らかな箇所は、煩を避けて省略した。

同様な話としては、安永六年（一七七七）刊の馬場雲皷（木室卯雲）『譚嚢』に「魔法」、安政三年（一八五六）刊の金龍山人（二世梅暮里谷峩）『落噺笑種蒔』に「びやうにん」が見える。（両書は『噺本大系』の第一九・一六巻に収載されており、「魔法」は一九巻一三〇～一頁、「びやうにん」は一六巻二一二～三頁。）またこの話は、艶笑落語の「弘法の馬」（「大師の馬」ともいう）にもなっており、小島貞二『定本艶笑落語1　艶笑小咄傑作選』（筑摩書房・ちくま文庫）に収録されている（九一～九三頁）。（同書は、一九八七年に立風書房より刊行の『定本艶笑落語（全）』の再編集分冊本。）ただし、変馬の術は注20に示すように、いずれも塗り薬ではない。

18 松枝茂夫・武藤禎夫『中国笑話選』（平凡社・東洋文庫、一九六四年）の一四四～五頁、武藤禎夫『江戸小咄辞典』（東京堂出版、一九六五年）の「魔法」の項（三八一頁）にすでに指摘がある。

19 原文は、内閣文庫所蔵清刊本による。

20 『金瓶梅』『笑府』に出自を持つこの艶笑譚の、近世日本における展開を眺めてみると、バラエティーに富んでいて面白い。変馬の術は、『正直咄大鑑』の「夢想の

馬ぐすり」では塗り薬であったが、『譚嚢』の「魔法」では呪文を唱えて手で撫でる、『落噺笑種蒔』の「びやうにん」では、地獄から現世に生き返るという中国原話を踏襲した内容に戻っている。また、落語の「弘法の馬」では、弘法大師の法力のかかった芋を食べて馬になるという展開である。

塗り薬という斬新な発想が『譚嚢』以降は消え、再び東洋的な変身の色合いを強めている点からすると、塗布薬による変身の発想は、結局日本においても違和感を完全に払拭できなかったということであろう。しかしまた、塗り薬、呪文、転生、食物と並ぶ変身の道具立ての多様さを前にする時、外来の文物に種々工夫を加えて新たな創造をおこなってきた、日本的な特性の一端をここにも垣間見る思いがする。

なお中国原話の驢馬が、『正直咄大鑑』等の翻案で全て馬になっているのは、この動物の輸入・繁殖が日本では行われず、通常目にする機会がなかったためである。詳しくは、加茂儀一『家畜文化史』（法政大学出版局、一九七八年）を参照（四九一頁）。

本稿は、名古屋大学中国語学文学会第一五回例会（二〇〇五年七月九日）での口頭発表「変身術と塗布薬」にもとづき、新たに執筆し直した。発表の席上、種々有益な御意見をいただいた方々に、この場を借りて厚く御礼申し上げる。